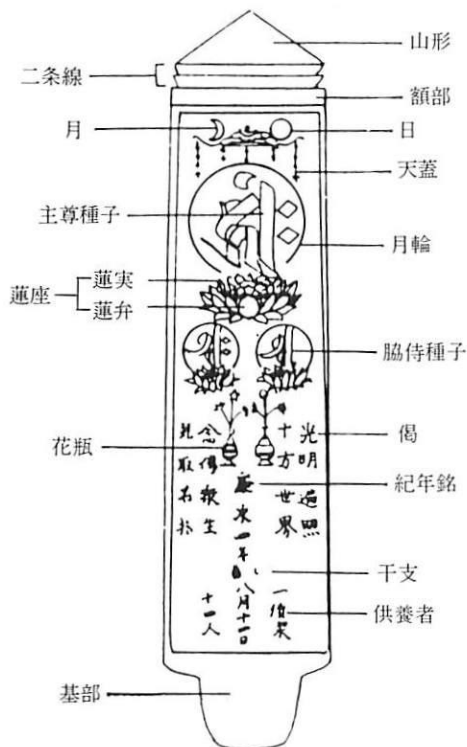


いた び 板 碑

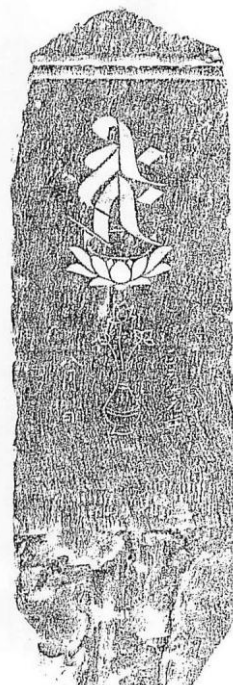
板碑は、鎌倉時代から室町時代にかけてつくられた塔婆とうぼの一種です。

板碑は亡くなった人の冥福めいふくを祈って供養するだけでなく、逆修供養げきしゅうといって、生前に自分自身の菩提ぼだいを弔い、来世での安楽を願い、現世の幸福を求めてつくられました。

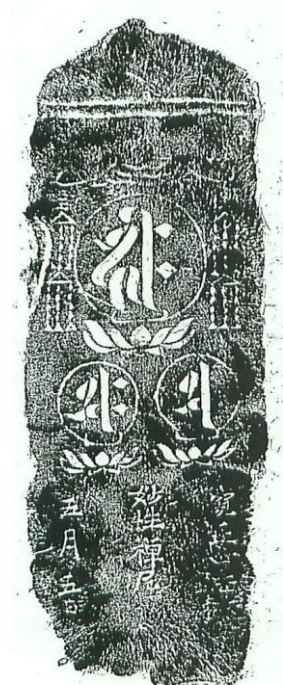
関東にはおよそ4万基の板碑が残っており、その大半は埼玉県に集中しています。これらの板碑はほぼ共通した形態をもつことから、一般に「武蔵型板碑」と呼ばれています。荒川上流の秩父で採れる青石あおいし（緑泥片岩りよくでいへんがん）を板状にし、頭部を三角に尖らせ、その下に二段の切り込みにじょうせん（二条線）を入れ、梵字や図像で本尊ほんじ（阿弥陀如来など）を刻み、さらに紀年銘きねんめいや造立の願文、願主名などが刻まれています。



板碑の各部の名称
（『図説歴史散歩辞典』山川出版社）



正応元年(1288)銘板碑



寛正4年(1463)銘板碑

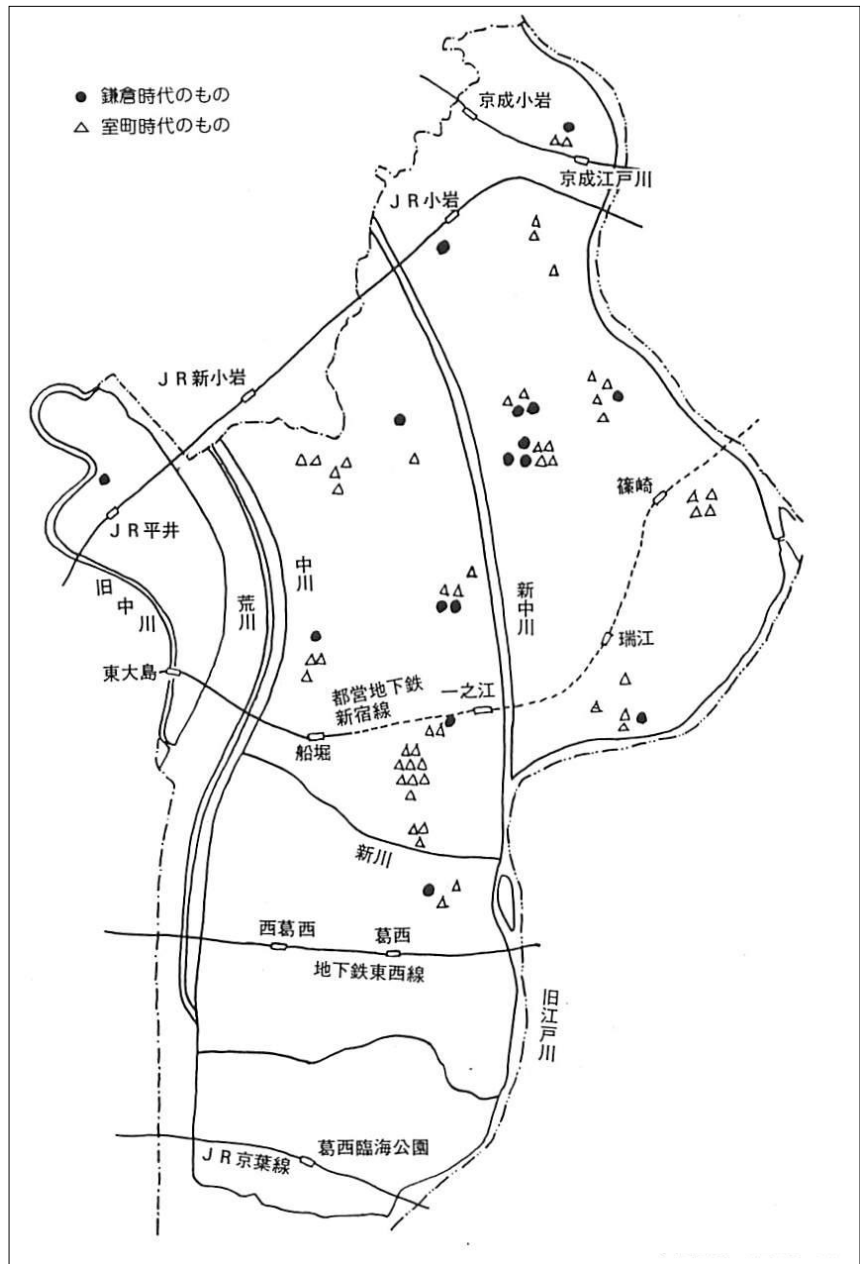
（江戸川区郷土資料室収蔵）

江戸川区内で現在確認されている板碑は139基で、最も古いものは文永10年(1273)、最も新しいものは天文16年(1547)のもので、区内各地で発見されている板碑の多くは、建てた年月日が彫られており、そのころの集落の分布がある程度わかります。鎌倉時代に小岩から篠崎、東葛西などの江戸川沿いの地域、一之江境川や小松川境川に沿った地域に集落ができ、室町時代になると、現在の葛西地区を除く区内全域に広がっていったことがうかがえます。

板碑の本尊は、亡くなった人や、これを生前に造立する人が、どのような仏・菩薩を信仰していたかをあらわします。例えば関東では8割以上が阿彌陀如来になっています。この阿彌陀信仰は天台宗、真言宗、浄土宗、時宗などに見られます。

板碑は塔婆であり、仏教から生み出されたものといえますが、必ずしも特定の宗教と密接に関係するものではなく、宗派を特定できないものが大半です。

板碑は17世紀初めには姿を消してしまいます。その理由は明らかではありませんが、墓石(石碑墓)や木製の塔婆の普及などによって、次第につくられなくなったという説があります。



江戸川区の主な板碑の分布(作図:千葉憲二)

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)